
青霧

南沙夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青霧

【著者名】

南沙夜

N9677D

【あらすじ】

そこは人気の無い館。時折聞こえる青年の笑い声。館に似つかわしくない笑い声をあげる青年は、そつと、掲げた鈴を鳴らす。

深い森にたちこめる濃霧は館をすっぽりと包むと、そのまま停滞した。静かすぎる辺り。

館の門は閉ざされている。

意味もなく鎖が垂れ、錆び付いた錠前は役目を終えたかのように門の下に置かれていた。

ぼろぼろとこぼれていぐ、何十年も前の塗装。

伸び放題の雑草に、野生化した野薔薇が広大な庭を占拠している。館までの道のりは長い。大きな両開きの、少し濃い茶色のドア。白い壁。

どこからともなく人の声がする。疲れきった、抑揚に乏しい男性の声。時折、館の雰囲気に似つかわしくない笑い声をあげていた。男性は玄関から近い、左手側の部屋にいた。男性というよりも青年のよう。着ている服はまたも館に似つかわしくない、喪服のように黒色のスーツ。右手には金色の鈴。

空いているほうの手でカップを持ち上げ、一口する。その優雅さ。

「おつきいたしましょうか」

漆黒のような長い黒髪の女性が、男性のカップに紅茶をそそぐ。その肌は白く、むしろ青白い。生きている人のような血色ではない。

「ありがとう」

青年が微笑むと、女性もそれに微笑みで返した。

「すべてお話していくださるのですよね」

「ええ・・・まずは自己紹介からいきましょうか。僕はクリルと呼ばれています」

「私はアリア」

「君を探していた。ずっと、ずっと昔から。伯父から、この館には誰もが見惚れてしまうような美しい女性がいると聞かされていたから、一度訪れてみたかった」

クリルは淡々と話しかけ始めた。田の前にいるアリアと名乗る女性に向けて。

僕がここを訪れるのに今日を選んだのには、理由があるんだ。でもそれを言う前に謝りたい。驚かして本当にごめん。何十年も経つたのに、まさか君がいるとは思っていなかつたんだ。盛者必衰つていうくらいだから、この館もなくなつていてると考えてた。だからまだここに君がいて、玄関に現れた僕から逃げるのを見たときはタイムスリップでもしたかと思つたんだ。

話に聞いたように未だ美しい君だつたから。

・・・ある人から君の生存を知つた。

この深い森の中にたまたま入り込んだ獵師がいたんだ。立ち入り禁止区域の紐に気づかなかつたんだろうね。その獵師はもう亡くなつたけど。

獵師はそこで、この部屋の真上の部屋に君がいるのを見つけた。窓からだつたけれど、君の噂は何十年経つても語られていたから獵師はすぐにわかつた。

そして僕の所にその情報がきたんだ。伯父を通してだけね。

そこでクリルは一旦話をやめると、紅茶を飲む。しばらくカップの中を眺めると溜息をつく。

そして言つた。

この館はやけに静かだね、と。

「そう・・・・・？」

「うん。まるで誰もいなかのようだ」アリアは困惑の表情を浮かべている。それでもかまわず、クリルは続けた。

「まるで皆死に絶えているかのようだ。もう、誰も生きてはいかないように」

「なにを言つてゐるの」

「真実をさ」

クリルはまたもう一口、紅茶を含む。

アリアは不安になつてきただのだろうか。クリルから目を離し、廊下へ駆けていった。

「この紅茶、味がない」

カップをテーブルに置くとクリルは立ち上がつた。そしてアリアの行つた方向へと向かう。

アリアはすぐに見つけられた。

「うそ・・・・」

「これが本当の現実」

そこは書斎。少し埃をかぶつたテーブルの向こうには廃れた元人間の姿。

白い壁に残る、赤茶けた痕跡。

アリアはまた別の部屋へと移動し、扉を開けた。

そこにも廃れた元人間がいた。変わらないのはその首に下げられたネックレス。

「わかつた？」

くずれしていくアリアにクリルは言つた。そして、話し出した。

何十年前にこらへんで強盗殺人事件が起きたんだ。

犯人たちはうまく忍び入つて貴金属やら高価なものを探んでいった。

しかしそうに見つかり、館内の人間全てを殺していった。

「やめて」

その館には噂された美しい女性がいた。けれど犯人たちはそんなことなど知らず、助けを呼びに行こうとした彼女をも殺した。その事件は、その女性の結婚式前日に起きたことだった。

「そうですよね、ポーツ伯父さん」

クリル、甥に呼ばれ陰から出る。

厳しい目つきで私を見る甥の足元には、何十年も変わらない姿のアリアがこちらを見ていた。

甥が金の鈴を軽く掲げる。

「アリア」

「聞かない。なにも、なにもしゃべらないで」

「でっ・・・・」

言葉を失った。

彼女の形が、まるで溶岩のように崩れ去っていた。その美しい姿が変わり果てた姿へと変貌している。

そこでクリルは鈴を持つほうの手を振った。

「やめて・・・・」わい

それを最後に、彼女は本来あるべき姿に戻った。

私は結局、最後まで彼女を救うことはできなかつた。何も言つてあげることができなかつた。

クリルがそつと、アリアだつたものを抱き上げた。

「伯父さん。話していただけますか」

「ああ」

甥にうながされ、先ほどアリアとクリルがいた部屋に入る。アリアが座つていた位置に、私は腰を下ろす。その隣にアリアは置かれた。クリルが飲んでいたはずの紅茶のカップは、先ほどまでなかつた埃がつもつている。褪せた色合い。

年月を感じる。

「私はアリアと結婚する予定だつたんだ。そう信じていた。それ以外に考えられなかつた」

クリルがカツプの埃をはらう。

私は汗をぬぐつた。

「彼女はたしかに美しく聰明で氣立てがいい。しかし私が本当に求めっていたのは別人だつた」

「それが伯母さん、ですね」

窓からの景色では、濃霧はいつこうに晴れていない。

クリルは埃をはらうのをやめ私を見ている。

私はこの甥が少々苦手だつた。いつも何かを隠しているようなのに引き出せない。掴めない。

「ああ・・・・」

「だからアリアが邪魔になつた。けれど結婚を取りやめることができなかつたから、彼女を殺した」

この甥に説明をするなど無意味だつたようだ。やはり最初からなにもかもわかっていたのだ。私があの事件の首謀者であることも、私が彼の後をつけていたことも。彼が「ここを訪れるのに今日を選んだのには理由がある」と言つていたのは、きちんと私がつけてきていることを知つていたからなのだ。

嫌な汗ばかりが頬を伝う。

「知つたからには生きては帰さない」

私は内ポケットから持参した拳銃を取り出す。銃口を甥に向けた。甥は微笑んでいた。

「そんなことをすると、アリアが悲しみますよ
「なに・・・・」

気付くと部屋内が明るい。埃が積もつていたはずのクリルの前の力ツブには、紅茶がつがれている。そして隣には、アリアがいた。

「そんな物騒な物はしまつてください」

そう言いながらアリアは私の前にもカップを置いた。

昔のようになに変わらないその美しさ。嫌いだつたわけではない。確かに思いも記憶もあった。

私はアリアの言う通り拳銃をしまうと、再び座る。

それを確認したアリアが微笑んだ。

「さ、召し上がってください」

「アリアの淹れたお茶を飲むのは何十年ぶりだらう・・・」

アリアは微笑んだまま、私の隣に座つた。

私はカップを手に取りその色を眺めた後、口をつける。変わらない、あの味。

彼女はいつも、私がそのとき飲みたいと思っているお茶を淹れてくれる。誰よりも私をわかつっていた。だから、泣きたくなつた。随分と遅い後悔をした。

「悪かつた・・・私がしつかりけじめをつけておくべきだったんだ。はじめから、君にしつかりと話しておくべきだった・・・」溢れた涙は止まらない。それとともに感謝と後悔と罪悪感で言葉がつまる。本当はもっと、話しておきたかった。自己満足なのかもしない。言い訳だと思われても、この時間をつなぎとめておきたい。できなかつたことをやり終えたい。

「もうよいのです」

アリアの顔が私のすぐ近くにあつた。その真剣な眼差しに胸が痛くなる。

「私はもうあなたや、あなたたちを許しています。だから、どうか・・・・・」

自然に添えられた手のぬくもり。彼女を殺したことなど遠い昔のようである。再び会えるとは思いもよらない。

久しぶりに泣いて、苦しいと思った。まるで子供のよう。言葉が出ない。話すこともできない。

「お・・・・まあ・・・・・」

呼吸が苦しい。伝えたいことが口にできない。こんなことは生まれて初めてだ。世界が揺れ、気持ち悪い。

「どうかされました？」

アリアは倒れかけた私を受け止めてくれた。

目の前にいる甥はカップを口にしながら、その目もとは笑っていた。

木々の隙間から光が差し込むのか、明るい景色となつた館。

「おぞろしい人だ」

クリルは伯父を抱きとめているアリアを見て、言った。

伯父の頭を撫でながらアリアは言つ。

「だつてこの人、私を殺したのですもの。私と、私の幸せを。私は許したと言つた。それは本当のことよ。でも、悔しかつた」
カップに積もる埃。荒らされた部屋。壊されている調度品。欠けたガラス。

すべてはこの美しさを失つた女性にひどく似合い、それゆえに氣味の悪さを醸し出す。

辺りに漂う甘酸っぱい香り。

「僕はこれでよかつたと思ひますけどね」

「よくなんかないわ」

アリアはそつと、伯父を座つていたソファーに寝かせる。そして窓の外を眺めるクリルと相対した。

「生きては帰さない」

クリルは微笑んだ。そして片手を掲げると、チリンと鈴をひとつ鳴らす。

夢のように美しかった女性は消えた。

そうして青年は部屋を出、館から去る。

白い外壁は薦が覆いかぶさり、扉の取っ手の金ははがれおちている。
あんなに長い間いた霧がどこへ去っていた。
大きな門は鎖でしつかりと固定され、錠前で決して開くことができ
ない。

(後書き)

おつきあいいただき本当にありがとうございました。

この作品が初めての投稿となります、いかがだつたでしょうか。

これはつい最近ホラーを書こうとしてボツになつたものです。

未熟者ですがこれから的作品もお読みいただけたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9677d/>

青霧

2010年10月20日03時19分発行